

34 清代医案における外感病と内傷病の舌象特徴の研究

梁 嶸¹⁾, 王 盛 花²⁾, 李 燕¹⁾, 王 召 平²⁾
 侯 楊 方³⁾, 官 君 達¹⁾, 李 方 玲¹⁾

¹⁾北京中医薬大学, ²⁾首都医科大学附属北京同仁医院, ³⁾復旦大学

本研究の目的は、清代医案の分析から、当時の外感病と内傷病の診断で舌診が運用された現況を理解することにある。

中国の所蔵医書を網羅した『全国中医図書聯合目録』には清代の医案書51書が著録され、うち清代前期(1644~1735年)は4書、清代中期(1736~1849年)は16書、清代後期(1850~1911年)は31書だった。この全体に舌診医案は3059例あり、うち外感病が1397例(55.72%)、内傷病が1110例(44.28%)だった。そこでカイ二乗検定も用い、両疾病の舌象構成と特徴を分析してみた。

1. 清代各時期における舌診医案の分布概況

清代前期の医案書で、舌診を運用した医案は6.61%だった。中期は7.13%で、後期は22.89%にまで上昇する。これは清代の臨床で舌診の応用が増加していた概況を示す。

2. 外感病と内傷病における舌質特徴の分析

記録された異常舌色は、淡白舌・紅舌・絳舌・青紫舌の4種に大別される。これらをカイ二乗検定した結果、外感病と内傷病の舌色構成には顕著な有意差($P<0.001$)が認められた。とりわけ外感病に出現した絳舌のオッズ比は1.493(95%信頼区間:1.098~2.029)、内傷病に出現した淡白舌のオッズ比は4.137(95%信頼区間:1.950~8.777)だった。

3. 外感病と内傷病における舌苔特徴の分析

舌苔の診察には苔色と苔質の弁別が含まれ、苔色は白苔・黄苔・灰苔・黒苔の4種に大別される。これらをカイ二乗検定した結果、外感病と内傷病の苔色・苔質の構成は異なっていた($P<0.001$)。すなわち外感病に出現する黄苔のオッズ比は1.402(95%信頼区間:1.158~1.698)、黒苔が出現するオッズ比は1.402(95%信頼区間:1.467~2.612)、燥苔が出現するオッズ比は1.699(95%信頼区間:1.280~2.256)だった。一方、内傷病に出現する薄苔のオッズ比は4.848(95%信頼区間:1.805~13.026)だった。

4. 外感病舌診医案の病種と舌象の特徴

外感病の舌診医案1397例で温病の範疇は計488例あり、うち温病198例、暑病127例、湿温病76例、疫病87例だった。異常舌色の記録は113例あり、うち紅舌と絳舌は92.03%に達し、淡白舌の記録はなかった。苔色記録は316例あり、うち白苔31.65%、黄苔42.09%、灰黒苔25%だった。

明確に診断された傷寒は僅か36例で、瘧は109例だった。傷寒と瘧の舌診記録は主に苔色の変化関連で、白苔の出現率が最も高かった。傷寒では紅舌が僅か2例しかない。瘧では21例の舌色記録があり、うち紅舌14例、絳舌6例、紫舌1例だった。

注意すべきは428例の外感病に病名記録がなかった点である。うち苔色記録があるのは250例で、白苔95例(38.00%)、黄苔100例(40.00%)、灰黒苔31例(12.40%)だった。舌色記録があるのは134例で、うち紅舌74例、絳舌44例あった。

結論

1. 清代は前期から後期まで、舌診を使用する比率が徐々に高まっていたことを本調査研究は示している。

2. 舌診医案に現れた外感病と内傷病の舌象特徴は異なっていた。外感病では絳舌・黄苔・黒苔・燥苔の出現率が高い。他方、内傷病では淡白舌と薄苔の出現率が高い。

3. 外感病の舌診医案は3類に大別できる。第1類は温病と疫病で、特徴は紅絳の舌象である。第2類は温病あるいは傷寒と明確に診断できないもので、多くは病名記載がなく、舌象に熱証の特徴が具わっている。第3類は傷寒・瘧・痢・嘔吐など多く傷寒病に帰属する病証が包括され、舌象には熱証の特徴が不明瞭だった。

上述の分析結果より、舌診が清代の外感病・内傷病の診断に応用されていた現況とその特徴を一定程度明らかにすることができた。